



日本産タマムシ科解説(5)

黒沢良彦

C. Tribe Psilopterini ツヤタマムシ族

アフリカ, 南米, 中米などに極めて多くの種類を産し, マダガスカル島にも特異な形をした特産の属が繁栄する。この他, 中央アジア, インド, インドシナ半島などにも若干の種類を産するが, その数はアフリカから距るにつれて急激に減少する。オーストラリアやインドネシアには1種も産しない。9属に分けられているが, 大部分の種類は次の属 *Psiloptera* Solier に属する。ただし, この分類は将来再検討を要する。

8. Genus *Psiloptera* Solier, 1833 ツヤタマムシ属

Psiloptera s. str. (南米), *Polybothris* Spinola, 1837 (マダガスカル島), *Alampetis* Thomson, 1878 (マダガスカル島), *Damarsila* Thomson, 1878 (アフリカ本土), および *Lampetis* Spinola, 1837 (中南米, アフリカ, マダガスカル島, アジア) の5亜属に分けられるが, これらは多分に便宜的なもので, 私は少なくとも *Psiloptera*, *Polybothris*, *Lampetis* などは独立の属として取扱いたい。また *Lampetis* や *Damarsila* については模式種の取扱について命名規約上の問題があり, 属名が変更される恐れがあるが, この問題についてはここでは触れない。

a. Subgenus *Lampetis* Spinola, 1837 ツヤタマムシ亜属

中米, 南米, アフリカ, マダガスカル島, アラビア, 近東, 中央アジア, インド, ビルマ, インドシナ半島, マレー半島などに広く分布しているが, 新大陸のものは別亜属になるかも知れない。日本には次の1種が知られている。

1. *Psiloptera (Lampetis) japonensis* Obenberger, 1914 ミズイロツヤタマムシ 分布: 日本(本州)。 *Tamamushia virida* Miwa & Chûjô ツマペニタマムシに酷似した色彩を有し, 青緑色で, 顔面, 翅鞘会合部, 体下面などは金色を呈する。極

めて稀なものであるらしく, 「日本産」と云う2頭の標本に基いて記載されたものであるが, その後採集されたことを聞いたことがない。アジアにおけるこの属の分布を見ると, インドからインドシナ半島にかけての地方に分布し, 中国では雲南省の国境地方を除けば全く記録がなく, 大陸周辺の島嶼にも全く産しないので, 本種が果して真に日本産かどうかは疑わしい。

III. Subfamily Trincopyginae

北米のテキサス, アリゾナ地方およびメキシコに産する唯一属 *Trincopyge* LeConte, 1858 だけを含み, わずか4種からなる。

IV. Subfamily Schizopininae

北米のカリフォルニア地方だけに産し, 4属7種を含む。いずれもハムシやカミキリムシの或る種に似た形をしていて, 到底タマムシとは思えない外観をしているので, ナガハナノミ科 *Ptilodactylidae* に移す人もある程である。

V. Subfamily Polycestinae ツツタマムシ亜科

ほとんど全世界の温帯に分布するが, 旧北区と新北区の中北部には種類が少ないかまたは全く産しない。次の4族に分けられるが, 日本には, その中の2族を産する。

1. 一前胸腹板は大きく, 中央部は平坦, わずかに中高, 跗節は簡単.....2. 一前胸腹板は狭く短く, 中高, 跗節は幅著しく広く, 爪の基部は内方に膨出する... *Julodimorphini*
2. 一爪は内方に1歯がある.....3. 一爪は簡単, 歯がない..... *Polycestini*
3. 一小楯板は背面から認め得る..... *Ptosimini*
一小楯板は背面から全く認め得ない..... *Acmaeoderini*

A. Tribe *Julodimorphini*

オーストラリアに1属1種 *Julodimorpha bake-*

welli White が産するだけである。

B. Tribe Polycestini

中南米、アフリカ、近東、東洋熱帯、オーストラリアなどに18属あるが、種類数はごく少ない。日本領土内には1種も産しないが、近隣地方では、中国南部、インドシナ半島、フィリッピンなどに *Strigoptera* Dejean, 1838, 中国南部、インドシナ半島北部などに *Polycesta* Solier, 1833, 台湾、中国南部、インドシナ半島などに *Coomaniella* Bourgoïn, 1924 などの諸属を産する。なお、*Coomaniella abeillei* Obenberger, 1940 の原産地は "Japan: Gyochi" となっているが、これは台湾の一地名(御池)であって、日本ではない。

C. Tribe Ptosimini ツツタマムシ族

総北区の中南部、東洋区、南アフリカ、マダガスカル、オーストラリア、南米などに約10属を有し、日本には次の2属を産する。

1. 一後胸前側板は認め得る……………2.
一後胸前側板は翅鞘上側板により覆われ認め得ない…………… *Polyctesis* Marseul
2. 一体は細長で円筒形、触角は第4節より鋸歯状を呈し、翅鞘に毛斑がない…………… *Ptosima* Solier
一体は短太で小型、触角は第5節より鋸歯状を呈し、翅鞘に毛斑がある
…………… *Paratrachys* E. Saunders

9. Genus *Polyctesis* Marseul, 1865 ホソタマムシ属

近東、インドシナ半島、中国南部、台湾、フィリッピンなどに5種を産するが、日本には1種も産しない。台湾では南端部にフィリッピンに産する *P. igorata* Heller ホソタマムシの亜種 *aenea* Hocscheck, 1931 を産する。

10. Genus *Ptosima* Solier, 1833 ツツタマムシ属

北米、ヨーロッパ、インド、インドシナ半島、中国、台湾、日本、朝鮮、フィリッピンなどに約15種を産する。日本には次の1種だけを産する。

1. *P. chinensis* Marseul, 1867 モンキタマムシ 分布: 日本(本州、九州)、朝鮮、台湾、中国。日本では九州の長崎で多く採集されるが、他では稀で、鹿児島と東京から記録されているだけである。雄の顔面は無紋であるが、雌には大きな黄紋がある。朝鮮の済州島から記載された var. *elongata* Pic, 1918 は雄そのものであり、var. *coreana* Pic, 1918 は雌そのものである。幼虫の加害植物は確かめられていないが、ヨーロッパの同属の種の例から、サクラ類かモモではないかと推定される。

11. Genus *Paratrachys* E. Saunders, 1873 ツツタマムシ属

日本特産の種類に基いて創設された属で、日本、中国南部、インドシナ半島、インド東部などから以南の東洋熱帯地方に約10種を産する。外観が一見チビタマムシ類に似ているので、以前はチビタマムシ亜科に属していたが、チビタマムシ亜科では翅鞘の上側板がごく小さく、狭く、後胸側板は完全に露出するのに反し、本属や *Ptosima* 属では極めて大きく、後胸側板と後基節の1部までも覆っている点で明瞭に異なる。日本には次の2種を産する。

1. *P. hederæ* E. Saunders, 1873 ミスジツブタマムシ(改称) 分布: 日本(本州? 四国、九州)、琉球(喜界ヶ島)。本州からの確実な記録はない。原産地は恐らく長崎であろうと推定される。学名はキズタ類(*Hedera* spp.)に基くものであるが、これは本種の加害植物のオオイタビ(*Ficus pumila* L.)やイタビカヅラ(*Ficus foveolata* Wall. var. *nipponica* Makino)を誤認したものである。A. Théry はトンキンから記載された *Trachys hypocrita* Fairmaire を本種のシノニムにしたが、これは本属ではあるが、この *hederæ* とは明らかな別種と考えられるので、本種の分布地から中国南部とトンキンを一応除外した。なお、本種の和名は以前はミスジケンタマムシと云ったが、これはチビタマムシ亜科のケンタマムシ属 *Aphanisticus* の和名とまぎらわしいのでツツタマムシに改めることにした。

2. *P. sp.* オオシマツブタマムシ 分布: 琉球(奄美大島、沖縄本島)。前種に似ているが、細型でかなりの相異点がある。いずれ記載しなければならぬが、ここでは和名だけを付しておく。加害植物はやはりオオイタビである。喜界ヶ島のものは本土産のものより小型ではあるが、間違なく *hederæ* であるのに、奄美大島のものが別種なのは興味深い。

D. Tribe Acmaeoderini フナガタタマムシ族

ただ1属を含むに過ぎないが、近年これを更に幾つかの属に別ける動きがある。

12. Genus *Acmaeodera* Eschscholtz, 1829 フナガタタマムシ属

地中海地方、アフリカ、北米、中米などには極めて多くの種類を産するが、アジアには近東地方を除いてわずかの種類を産するだけで、オーストラリアには1種も産しない。南米では主としてアンデス地方にわずかの種類を産する。日本領では琉球に次の1種を産するだけである。乾燥地方に繁栄している属で、幼虫は草本に加害する。成虫はよく花に来る。

1. *A. luzonica* Nonfried, 1895 キボシフナガタタマムシ 分布: 琉球(八重山群島)*、台湾、フィリッピン、インドシナ。台湾には普通に産するが、琉球からは今回初めて記録される種類である。(東京国立科学博物館)

* 18, 八重山群島波照間島, 26. vi. 1969, 楠井善久採集

○ミゾムネマグソコガネの新産地

ミゾムネマグソコガネ *Aphodius (Paremadus) mizo Nakane, 1967* が熊本県で採集できたので報告する。従来、産地は本州（大阪箕面、奈良春日山、奈良多武峯、丹波篠山、相模大山）に限られ、九州からは未記録であった。

6頭、熊本県球磨郡五木村 頭地、24. iii. 1968、石田豊明。

御教示いただいた三宅義一氏に厚く御礼申し上げます。
（奈良市 北村 豊、熊本市 石田豊明）

○オオチャイロハナムグリの新産地

オオチャイロハナムグリは九州では少なく、産地として英彦山、障子岳、多良岳、国見岳、市房山、栗野岳、霧島山等が報告されているが、奇妙に九重山系から発見されなかった。しかるに筆者は直海俊一郎氏が1969年7月26日大分県由布院町山下池付近の杉の洞穴から採集された1♂1♀を検査することができ、採集者から発表することを委ねられたので本報の新産地として報告する。なお発表を許された直海俊一郎氏に厚くお礼申し上げる。（熊本市 大塚 勲）

コルリクワガタの発見

黒 沢 良 彦

昨年（1968）12月15日の例会の席上で、木村欣二氏よりムツボンタマムシ類の同定のため、一箱の標本をあずかった。たまたま、その箱の中にはクワガタムシ類も収められていて、同氏が伊豆遠笠山で獲られたルリクワガタ6♂♂3♀♀があった。これらの標本を眺めていて、私は「おやっ」という気になった。見馴れた十和田や日光あたりの標本とは何となく違うのである。北アメリカには4～5種類のルリクワガタがいる。日本に2種類いても不思議はない。肝心のムツボンタマムシをそっちのけにして、早速検鏡してみても驚いた。♂も♀も確かに異なるのである。前胸背が後方に狭まり、後縁角が角張り鋭い。その他翅鞘の皺が強く、前胸背や頭の点刻も粗く強く、2つのタイプの間には中間型がない。それで伊豆のルリクワガタが別亜種になるのではないかと考えたが、更に驚いたことに、博物館にある標本の中に伊豆型と同じ様に前胸背の後縁角が鋭い法師温泉産の1♂と奥多摩産の1♂が発見されたので、別亜種とすることは出来なくなって来た。そこで法師産と伊豆産のゲニタリアを取り出して十和田産のものと比較してみると、前2者と後者とははっきり異なることが判った。従って、両者は当然別種と考えなければならぬ。このことを数人の仲間と話したところ、早速各地の標本が集まったが、その中に日光地方産の伊豆型の♂が数頭あったのである。

Lewis のルリクワガタ *Platycerus delicatulus* の産地は中禅寺産のものを主にし、これに大台ヶ原山（奈良県）、木曾御岳、大矢山（熊本県）などの標本を加えた25♂♂20♀♀によるものであるが、主として中禅寺産の標本によっている。しかも原記載には最も顕著な相異点である前胸背の後縁角の形状については全く言及していない。従って、日光あたりに両種共に産するとなると、Lewis の標本にも両種が混っていた可能性が強い。そこで、当時ロンドンに滞在していた林業試験場の森本桂博士にお願いして、大英博物館にある Lewis の標本を調べて頂いたところ、私の想像した通り、Lewis の標本には2種類が混在しており、Lewis 自身により「Type」のラベルがつけられたものは中禅寺産の十和田型の1♂であり、他に3♂♂7♀♀の十和田型、1♂2

♀♀の伊豆型があることが判った。この数は Lewis の記した25♂♂20♀♀よりはかなり少ないが、他の標本は恐らく他の研究家に博物館から送られたものと考えられ今となっては調べることは不可能である。

そこで私は、Lewis が type と指定した、前胸背の後縁角が円い、十和田型の♂を *Platycerus delicatulus* Lewis, 1883 の lectotype と認め、前胸背の後縁角が角張り、時に突出する伊豆型を新種 *P. acuticollis* n. sp. として、国立科学博物館研究報告12巻3号誌上で発表し、後者に「コルリクワガタ」と云う和名をつけた（1969. ix）。

両種共に現在は日本特産で、その分布は、コルリクワガタは北は山形県東田川郡立川町（月山の北麓）から南は九州の祖母山に至る本州と九州の低山地に広く分布し、多少の地方変異があるが、ルリクワガタは十和田地方から中国地方、九州の英彦山と五家荘に至る地方に分布し、全く地方変異がないことが判った。本州、九州では両種が混産する地方も多いが、一般にルリクワガタがコルリクワガタよりも高所に産し、コルリクワガタを産しながらルリクワガタの産しない地方が多い。北海道と四国は確実な標本を検査することが出来なかったが、前者にはルリクワガタだけ、後者には両種を産する可能性が強い。「石鎚山と面河溪の昆虫相」（四国昆虫学会会報、第3巻、1953）の第7図版第5図の写真は恐らくコルリクワガタだろうと推定される。

前述の様に、コルリクワガタは、伊豆半島産のものは一般に前胸背の側縁が中央から前で拡がり、後方に狭まる点の特徴であるが、他地方に中間型があり、また九州産は点刻が弱く、翅鞘の皺も細かく弱いなど、かなりの地方変異が見られるので、将来多くの標本を調べれば幾つかの地方型に分けられるかも知れない。一方ルリクワガタは十和田のものも、中国地方、紀伊半島、九州などの地方のものもほとんど変化が認められない。

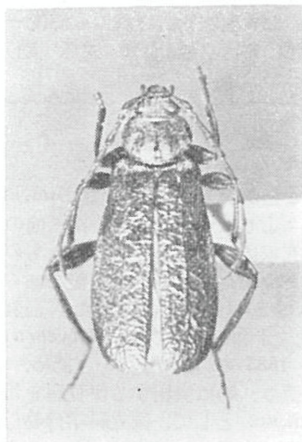
以上が私がコルリクワガタを発見したいきさつであるが、余りにルリクワガタに夢中になり過ぎて、木村欣二氏には何とも申し訳ないことではあるが、肝心のムツボンタマムシの標本の同定はまだ果されてない。（国立科学博物館）

○ミドリヒラタカミキリの採集記録

昆虫生態図鑑天牛篇(1969年)によればミドリヒラタカミキリ *Callidium aeneum* (DeGeer) の日本における記録は北海道糠平より1例を見るに過ぎないところがあるが、筆者は下記の標本を所蔵しているので報告する。

1頭、北海道幌加, 7. vii. 1968, 石田豊明。

本種はルリヒラタカミキリに近縁(同属)である



体長 9~15mm

が、前翅に明瞭な横皺を有することおよびその色彩は緑銅色を帯びることにより容易に区別される(写真参照)。産地幌加は東大雪山麓にあり、糠平と近接の地である。末筆ながら貴重な標本を御恵与下された石田豊明氏および写真を写して下さった立川周二先生に深く感謝致します。

(東京大田区 酒井 香)

○西表島より新記録の甲虫 3 種

本年夏、沖縄八重山群島において、主として甲虫類の採集を行ったが、そのおり下記未記録の3種を得たので報告する。

1. *Coenochilus striatus* Westwood スジホソコガネ 1頭、御座岳, 3. vii. 1969.

本種は沖縄諸島では石垣島から知られているのみであった。

2. *Protactia exasperata satoi* Nakane オオンマアオハナムグリ 沖縄亜種 1頭、干立, 5. vii. 1969

本種はトカラ群島から沖縄本島にかけて分布しているが、産地の島ごとに色彩・斑紋等に変異が見られ、現在では6亜種に分けられている。八重山群島からは今回初めて採集されたが、色彩・斑紋等は沖縄島産亜種と同じ傾向を呈しているのて上記学名にて記録した。しかし亜種名はより多くの個体を検した上での再検討が必要と思われる。

3. *Buprestis haemorrhoidalis* Herbst クロタムシ 1頭、船浦, 8. VII. 1969.

本種は屋久島以北の地域に分布するものと奄美大島に分布する2亜種が知られていたが沖縄諸島からは未発見であった。この西表島産種が奄美大島産と同じ亜種か否かの検討は黒沢良彦博士にお願いした。(東京農大 藤田英生)

○テツイロヒメカミキリの生態について

テツイロヒメカミキリ *Ceresium sinicum* White は夜間燈火に集まるところを採集できるが、最近食樹が判明し被害木から大量に捕獲できるようになった。

筆者は夜行性の本種を昼間かなり捕えることができたので報告する。

1968年6月28日に東京都新宿区戸山町の勤務先の庭でアカメガシワの立枯木を見つけた。水分を吸収しなくなって久しいとみえ、葉が褐色になって両端から巻き込んでいた。何気なくこの枯葉を1枚とり巻き込んでいる部分を引き伸ばしたところ、奥からテツイロヒメカミキリが1頭出てきた。予期していなかったのが驚き、残りの枯葉を全て調べてみたところ、入っていない葉も多かったが、1葉から1頭、たまには2、3頭も見出され、合計38頭(雄33頭、雌5頭)を得ることができた。

なぜこのようなところに多数隠れていたかは興味ある問題である。夜行性(本種の複眼は粗大である)なので昼間は枯葉中の薄暗い隙間にひそむのか、それとも梅雨時なので雨露を凌ぐために入ったのか。とにかくアカメガシワの葉は幅広く、枯葉の円筒状の部分は適当な光と温度湿度が保たれてテツイロヒメカミキリにとって居心地の良い住家であったに違いない。

その後、このような幸運にはぶつからないが、同様の経験をお持ちの方があればぜひ御連絡頂きたい。(千葉市作草部町 辻 啓介)

○越後の天牛 3 題

1. クリイロシラホシカミキリ

1♂, 飯豊山湯の平, 27. VI. 1968, 白畑孝太郎。

本種は新潟県からはじめて記録されるものである。貴重な標本を恵与された白畑氏に深謝する。

2. ヒラヤマコブハナカミキリ

1♀, 新発田市組倉山, 3. v. 1968, 松田天次。

本種は既に筆者(1956, 1961)が新潟県に産することを報じたが、その後久しく採れなかったものである。採集者の言によれば、登山中たまたま目前に飛来落下したものを採集した由である。

3. トウキョウトラカミキリ

1♀, 新発田市水谷沢, 3. v. 1969, 青木泰明。

本誌第3号に、新潟県未記録種として記録したが、本個体も同一産地での採集品である。花上で採集したという。(新潟県新発田市 小池 寛)

甲虫談話会

会費(1カ年)500円、第8号は1月末発行予定、投稿メ切は12月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電(822)0111, 振替東京60,664

ニューギニア産甲虫類(コガネムシ、クワガタムシ、カミキリムシ、ゾウムシ、其他)が多数入荷しています。御希望の方は返信料御封入のうえ価格表を御請求下さい。

東京都練馬区石神井局私書箱3号

大蔵生物研究所